gtg

旅のフリーマガジンを発行している、慶應義塾大学公認学生団体S.A.L.。
幅広いフィールドで活動する学生たちが、旅への思いを綴る連載エッセイです。

#02

ペルシャ湾の味は、しょっぱかった。

広田 潤平

“一人旅をしよう”。大学生最初の元旦。辻堂の海辺から初日の出を眺めながら、そう決意した。始まったばかりのモラトリアムには刺激がまだまだ足りなかった。日本に慣れきってしまった自分へのスパイスを探しに、僕は日本を飛び出した。

まもなく僕はUAE（アラブ首長国連邦）の地を踏んだ。中東に行きたい、その一心で日本から12時間をかけてこの地にやってきた。この国はオイルマネーの恩恵をうけた豪華な建物や億万長者のイメージが強い。でも僕がこの国に来たのはアラブの文化や歴史を感じたかったからだった。

UAEを構成する一首長国、シャルージャ。ここはドバイのベッドタウン的な役割を果たす一方で、アラブ人の歴史や文化の保護にも力を入れる地でもある。ヘリテジエリアと呼ばれる地区には昔ながらの街並みが今も残る。砂漠の砂のように乾いたクリーム色に塗られた道。さらに辺り一帯を隙間無く埋めるように、白やクリーム色をした高い壁の四角い建物が並んでいる。時折現れる方舟形の木製の扉や古風なガラスの街灯が辺りを彩るが、どの壁にも窓はない。いたって単調な街並みにも思えた。角を曲がるたびに前に見た景色が連続する。しかしアラブ人の住空間に迷い込んでしまったようなこの感覚が僕の胸を高鳴らせる。次第に自分がどこを歩いているのかさえわからなくなってくる。右も左もわからないまま歩けば、白くそびえる大きなモスクがたちまち現れ、スークと呼ばれるアラブ式の市場にたどり着く。すると、どこからともなく男声の澄み渡った独唱が町中にこだまし始める。日本の演歌にも似た味わい深い声に、自分の鳥肌が立つのがわかる。

「これはアザーンだよ。」

アザーンとは礼拝の始まりを告げる男性の語りのことだ。毎日町のモスクから町全体に響き渡る。伝統色の白い衣をまとった愛らしい青年がそう優しく教えてくれた。

5日ほどの滞在の後、ラス・アル・ハイマというのんびりとした地方の首長国を訪れる。夏の気温が50℃にもなるこの地域では、日差しの強い昼間には一旦店を閉め、日が傾くと人々は再び動き始める。この日、僕は夕暮れとともにペルシャ湾を眺めに出かけた。町の中心の大きな通りを離れると、民家はまばらになって、歩く人の姿も少なくなる。海辺にも遠くのほうで子どもと戯れる夫婦の他には誰もいなかった。重いリュックとカメラを砂浜におろして水際に足を運ぶ。ドバイでの喧騒や日本でのせわしない日常とはまるで違っていた。青いまっさらな海がただゆっくりと波を返していた。どんなに耳を澄ましてもさざ波だけが静かに音を立てていた。ふと海に右手を浸して海水を舐めてみる。”辻堂の海より塩気が強い” そんな気がした。同時に旅のしょっぱい記憶も込み上げる。舟乗りに騙されて余計にお金を払わされたこと、夜行バスを乗り逃して割高のホテルで延泊をしたこと…。「失敗して初めて一人前」、そんな先人の言葉を思い出しながら、自分が確かに旅人になれた気がした。

誰もがSNSやメールを使って、世界中の人々と手軽に見たもの聞いたものを共有できるようになった。自分の家の外に出なくても、まるで旅をしているかのように、世界の美しい光景が見れて、世界の歌や語りを聞くことができる。全くそれが悪いわけではないと思う。しかし人間には五感があり、そこには写真や動画では楽しめない感覚がある。空腹をくすぐるケバブの香り、笑顔で握る手のぬくもり、ペルシャ湾の塩味。旅の間だけは、人間が忘れかけた野性をとり戻せる気がする。だから僕はまた、旅に出たいと思う。

慶應義塾大学公認 学生団体 S.A.L.
| ホームページ | http://salkeio.com/
| Twitter アカウント | @sal_keio